

みる かたる つくる

2019 VOL.46
(通巻108号)



ART NEWS
千葉県立美術館報

令和元年度特別展 絵のみち・祈りのこころ

—日本画家

後藤純男の全貌—



千葉県立美術館蔵〈山門雨後〉



後藤純男美術館蔵〈鹿苑寺庭園〉

後藤純男は昭和5(1930)年、千葉県東葛飾郡木間ヶ瀬村(現在の野田市)の真言宗の仏門に生まれます。僧となる修行をしながら絵を学び、山本丘人、次いで田中青坪に師事。昭和27(1952)年、22歳の時に院展に初入選を果たします。父の後押しもあり、画家の道を選びますが、その道は修行をした仏の道とどこかで混じり合い、深い精神性を湛えた比類ない作品が生まれます。

昭和30年代に画家が目指したのは北海道でした。層雲峡に取材した《涼想》は、院展で最高賞である日本美術院賞(大観賞)を受賞します。静けさの中に響く滝の音、壮大で厳しい自然の中にたたずむ人間の小ささを感じさせる本作は、《那智滝図》(根津美術館蔵)にも比肩する荘厳な雰囲気をつたえます。北海道の大自然は画家の心に深く棲み着き、平成3(1991)年上富良野町の地にアトリエを構えるに至ります。

まだ20代の頃、父の伝手を辿って関西や四国の寺50か所以上へ写生旅行にでかけました。この旅は機が

開催概要

会 期／ 令和元年11月2日(土)
～令和2年1月19日(日)
開館時間／ 午前9時～午後4時30分
休 館 日／ 月曜日(月曜日が祝日の場合は翌火曜日)
年末年始(12月28日～1月4日)
入 場 料／ 一般1000円(800円)、
高校・大学生500(400)円
※()内は20名以上の団体料金
中学生以下・65歳以上・
障害者手帳をお持ちの方と介護者1名は無料

関連事業

美術講演会「後藤純男と戦後日本画」
日時：11月16日(土) 14:00～15:30
講師：草薙奈津子(平塚市美術館館長)

ワークショップ「もこもこもりあげ! いわえのぐ」
日時：12月14日(土) 13:00～15:30
講師：早川実希(日本画家)
森永悠太(日本画家)

熟したように昭和40年代以降、京都、奈良の寺院を描いたシリーズへと結実し、画家の地位を不動のものとします。《春映法隆寺》など、繊細な四季折々の表情や、古寺の重ねてきた歴史を捉え、画家の心象を投影し、そこにはまるで、仏性が宿るかのようです。

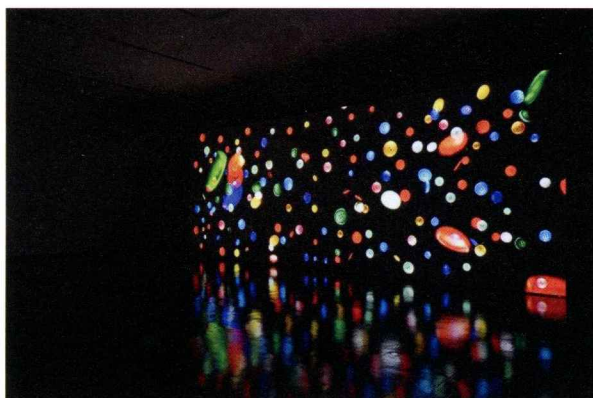
昭和54(1979)年には初めて中国を訪れ、以降毎年のように訪中します。悠久の時間が流れる山河や農村の風景との出会いは、修行僧のように自己を律する姿勢から、より開放的な気分へと画家を新たな境地に導きます。院展で内閣総理大臣賞を受賞した《江南水路の朝》では、ほのぼのとした運河沿いの村の人々の営みを描き出し、画境を広げました。

本展は、初期から晩年までの作品60余点で構成します。また、奈良・長谷寺に奉納された襖絵《夏冬山水》を期間限定で特別展示するとともに、東京・高幡不動尊金剛寺の襖絵《桂林山水朝陽・夕粧》や護国寺奉納作品も展示し、画家の画業を過去最大規模で紹介します。

レポート 「千葉の新進作家vol.1 志村信裕 残照」

■会期：令和元年7月13日（土）～9月23日（月・祝） ■会場：千葉県立美術館第1、2、8展示室

本展は、千葉県ゆかりの新進気鋭の作家を紹介し、現代美術に親しむことを目的に始まった展覧会シリーズの第1回目として開催されました。志村信裕（1982～、東京生まれ）は、現在千葉県内に拠点を置いて活動する現代美術家です。映像を主な表現手段とし、武蔵野美術大学大学院修了の頃から、ボタンや文房具などの日用品をモチーフにしたインスタレーションなどを各地で発表してきました。これら初期の映像インスタレーション作品では、誰もが見知った日用品や日常風景をモチーフにすることによって、鑑賞する人の記憶や感情を揺さぶるような経験を生んできました。本展では、そのなかでも2009年に発表された《jewel》をはじめ、《光の曝書》（2014）、《bucket garden》（2012）、《Dress》（2015）の4点のインスタレーションを展示しました。志村の提案により、第1、2展示室には大きな作品と小さな作品を織り交ぜた緩急のある空間が生まれました。



《jewel》2009年



第8展示室 展示風景

第8展示室では、《jewel》から10年を経て発表された最新作と当館が所蔵するバルビゾン派の絵画3点を展示しました。《Nostalgia, Amnesia》（2019）は、かつての作品とは異なり、インスタレーションの形態をとらない、志村の作品が転換期を迎えたことを示す重要な映像作品のひとつです。この作品では羊がテーマになっており、志村自身がフランスのバスク地方と千葉の三里塚を取材し、撮影した映像が素材となっています。人間の歴史に深く関わってきた家畜動物である羊を取り巻く現代社会の様相を、まるで一冊の本を読むかのように丁寧に編集し、描いています。ミレーやトロワイヨンといった当館所蔵の羊が描かれた油彩画と同じ空間で展示することによって、羊と人間の関わりそのものや、羊という美術史的なモチーフについての時間的な接続が試みられた空間となりました。当館所蔵作品と共に現代美術が展示されたことによって、長らく近代美術を所蔵、研究してきた当館の活動が現代へとさらなる広がりを見せるきっかけとなった展覧会になったのかもしれません。

事前ワークショップ

『動物の土鈴をつくろう』

- 6月27日（木）@千葉市立坂月小学校
- 7月 7日（日）@千葉県立美術館



ワークショップ

『文庫カバー屋台』

- 8月4日（日）@千葉県立美術館

トークイベント

志村信裕アーティストトーク① 「表現の変容、そしてこれから」

- ゲスト：森啓輔（千葉市美術館学芸員）
- 7月20日（土）@千葉県立美術館講堂



志村信裕アーティストトーク② 「周縁をめぐるー《Nostalgia, Amnesia》を中心に」

- ゲスト：港千尋（写真家、映像人類学者）
- 9月7日（土）@千葉県立美術館講堂

キュレータートーク「これからの新進作家展」

- 登壇者：伊藤貴弘（東京都写真美術館学芸員）、神野真吾（千葉大学准教授）、古屋梨奈（本展担当学芸員）
- 9月23日（月・祝）@千葉県立美術館講堂

冬(1月～4月)のアート・コレクション

1月28日(火)～4月12日(日)

当館では収蔵作品をアート・コレクションの名称で季節ごとにテーマを設けて紹介しています。

近代洋画の先駆者

浅井忠11 トーハクの名画がやってきた!

当館が所蔵する浅井忠作品に、東京国立博物館の所蔵作品貸与促進事業の協力を頂き、重要文化財《春畝》、グレー時代の傑作《グレーの秋》などの浅井の代表的作品と、フォンタネージが来日中に描いた《風景(不忍池)》など7点を借用し、浅井の初期からフランス留学時代までの活動を紹介します。

北詰コレクション メタルアートの世界IV

平成28年度に収蔵された北詰コレクションから、工芸の革新を目指した高村豊周とよしゅうなどの作家たちの作品を紹介します。

高村は高名な彫刻家、高村光雲の次男であり、兄は彫刻家の高村光太郎で、佐倉市出身の鑄金家、津田信夫に師事しました。制作のみならず文才にも恵まれ、大正末から昭和初期にかけて、工芸研究団体の機関紙「无型」むけいを自費出品するなどして、当時の工芸界を啓蒙しました。

瑛九・鬚嘯・池田満寿夫

前衛美術の先駆者、瑛九と、瑛九に影響を受けたあいつ鬚嘯、多方面での活動で知られる池田満寿夫の版画作品を紹介します。

瑛九は絵画、版画、写真など多様な技法を駆使した作品で知られ、鬚嘯は「フルクサス」と呼ばれる多国籍の作家による美術・音楽・詩・舞踏など広い芸術活動を行ったグループに所属、池田満寿夫は版画の他に、小説、映画監督、陶芸など様々な分野で才能を発揮しました。

Ch_AIR

Ch_AIR(チェアー)とは、作家が千葉県立美術館に何度か来館して制作活動する機会を提供する企画です。一般にアーティスト・イン・レジデンス(Artist in Residence)と呼ばれています。

作家が美術館に来館することと関連付けて、「椅子」を意味するChairを企画名としました。実施内容等については、決まり次第ホームページで紹介します。

これまでのアートコレクションより

春のアート・コレクション(4月20日～7月7日)では3つの展示を行いました。「富取風堂」展では、日本画家富取風堂の作品を、当館が所蔵する二百冊を超える富取の描いたスケッチブック等の研究資料から考察しました。富取は花鳥の写生のほか、仏像や古典的工芸品、後期印象派、野獣派、立体派などの画家達の作風も研究して制作に生かしており、対比しながら展示紹介しました。次に「浅井忠10ー浅井忠の洋画」として近代洋画の先駆者浅井忠の生涯にわたる洋画作品を①バルビゾン派 ②旅③明治美術会 ④洋画排斥運動 ⑤写真 ⑥報道画 ⑦フランス留学 ⑧デザイン ⑨人物画 ⑩教育者の10のキーワードから展示紹介しました。「屏風になった作品たち」では、屏風固有の特徴を作者がどう効果的に作品に生かしたかを「画面を構成する」「中央



富取風堂《花》1953年

の奥行きへ誘う」「動きが生み出すストーリー」「臨場感のある構図」「余白と余韻」「大胆な構図が生み出す装飾性」の6つのコーナーにより日本画・洋画・工芸・書の作品で紹介しました。

夏のアート・コレクション(7月13日～9月23日)では「不思議の森美術館」と題して、「育む森」「聖なる森」「潜む森」「棲む森」「恵みの森」

の4つの森に見立てた会場を冒険するように鑑賞する展示を行い、洋画・日本画・版画・工芸・彫刻・書の作品を紹介しました。



澤田志功《森は観つめる》



星襄《夜明け》

実技講座

当館の活動の柱、「みる・かたる・つくる」のうち、「つくる」活動の一つとして、県内の作家を講師に招き、実技講座を開催しています。参加者の作品を紹介する「美術館とつくりよう展」を、令和2年3月に開催します。

【陶芸基礎】

～暮らしを彩る器を作ろう～

5月・6月の6日間

茶碗を紐づくりや手びねりで、マグカップや皿を板づくりで制作しました。制作にあたっては、あらかじめデザインや文様を考えてきたものをもとに、思い思いの作品づくりに取り組みました。粘土は一人2kg用意したので、5～6個の作品が出来上がりました。釉薬は、講師によって試し焼きを行い状態の良いものを10種類ほど用意し、各自うつわにふさわしい装飾を行いました。水谷俊雄先生の丁寧な指導のおかげで、満足のいく作品に仕上げることができました。



【陶芸応用】

～器に施す加飾を学ぼう～

7月・8月の7日間

ろくろを使い、直径20cm～25cmの皿や花瓶を制作しました。初めての人は何回も失敗をしましたが何とか作品を仕上げることができました。ハサミや手でちぎってかたどった和紙に呉須をしみこませ、これを素焼き後の器に貼り付けて模様にしたり、筆による絵付けを行いました。大きな花瓶を作る人や、組皿をつくる人など各自個性豊かな焼き物ができました。講評会では、水谷俊雄先生から講評があり、一人一人からの質問に丁寧な説明がありました。



【ホリデーアート蜜蝋画】

～蜜蝋画で不思議な抽象画を描く～ 10月26日・27日(全2日)

ミツバチの巣から取れる蝋を精製して出来る蜜蝋を使い、版画の技法と和紙や新聞紙、墨汁など様々な素材と組み合わせて、独特な抽象世界の作品づくりを行いました。



これからの実技講座

【金工(鍛金)】

◇11月7日、13日、14日、19日、21日、26日、28日(全7日) 【定員15名】

◇講師：平山記通先生 ◇参加費 14,000円

◇銅板を叩いて立体物に成形します。鍛金の基本的な技法や工具の取扱いを身につけ、初めての方はカップ、経験のある方、ご希望により好みの器などをつくります。

【ホリデーアート・コラグラフ】

◇12月7日・8日(全2日) 【定員20名】

◇講師：上田靖之先生 ◇参加費 5,000円

◇身近にある様々な素材を台紙に張り付け、アルミホイルを使って銅版画のような効果の版画作品を作る講座です。

【篆刻】

◇1月24日、31日、2月7日、14日(全4日) 【定員20名】

◇講師：那須大卿先生 ◇参加費 9,000円

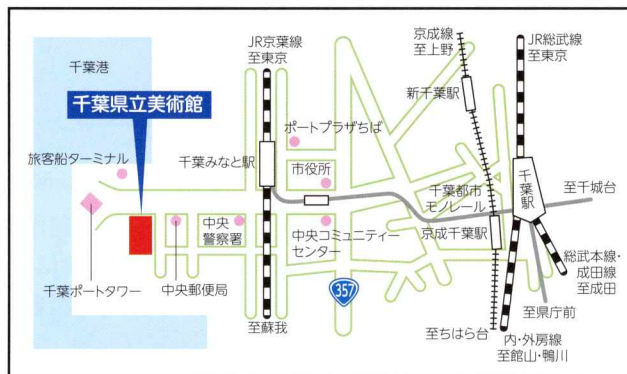
◇篆刻の歴史を学ぶとともに、姓名等から文字を選び、1文字のもの、2文字のもの、計4つの雅印をつくります。朱文・白文の制作方法や用具の取り扱いを学び、篆刻の楽しさに触れる講座です。

*詳しくはホームページをご覧ください(043-242-8311)までお問い合わせください。

今年度のワークショップから

幼児(年長)から小学生までの子どもたちを対象に、新たな創作活動の場として「けんび子どものアトリエ」を開催しています。このワークショップは、「ゼロからなにかを創り出すこと」そのものを子どもたちが楽しむもので、衣食住や季節といった子どもたちにとって身近なものをテーマとして、沢山の材料のなかから、自由な発想と創造力で作品を創り上げていきました。

また作品鑑賞会では、自分が一生懸命に考えて工夫したことをみんなの前で発表することが出来ました。



千葉県立美術館 〒260-0024 千葉市中央区中央港1-10-1
Tel.043-242-8311 Fax.043-241-7880

URL:<http://www2.chiba-muse.or.jp/ART/>

千葉県立美術館報「みる かたる つくる」VOL.46
(通巻108号)

2019年11月27日発行

